

- 1、「腰に帯を締めて」につき、旧約聖書の二か所を覚えたい。まず箴言。「力強く腰に帯し」(31:17)が“有能な妻”という見出しのイロハ歌の一節にある(旧約p.1033)。次にエレミヤ。預言者が語ることの根拠を言う。「あなたは腰に帯し、立って、語れ」(エレミヤ1:17)。
- 2、新約聖書ではルカ福音書の「腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい」(12:35)。「帯」はルカでは、終末論的信仰そのものの意味。生きる姿勢そのもの。終末を現す言葉「テロス」は目的と終着を同時に意味する。目的と終着は既にはっきりしている。これが「帯」だ。ペトロの手紙1:13。「いつでも心を引き締め」は意識、原文は「心の腰に帯を締め」。意識では倫理的意味の緊張に受け取られかねない。聖書の直裁は雰囲気伝わりにくい。古代では、外出や仕事にあたって長く幅の広い上着を羽織ったさい、腰の辺りで帯を締めるのが普通であった。「帯」は当たり前のこと。その当然さが、信仰の領域でも比喩に用いられたのである。
- 3、ペトロの手紙は、この終着と目的、つまり「憐れみの出来事」を1章3～4節で懇々と語る。3節4節の、主語は徹頭徹尾「神」が主語であることが特徴。「帯を締める」とは、既に、神の出来事としての憐れみの内側にいる日常的事実の確認である。13節は、このことを「だから」の一語に凝縮させた。このような語り口が聖書では独特である。「あなたがたは、神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい」(エフェソ5:1, p.357)。[直接法(・・・ですから)に続けて命令法(・・・しなさい)を語る語りである。
- 4、ベルトの贈り物にまつわる思い出を3つ。神学校卒業後最初に任地でのベルト。「しっかりやれよ」。牧会10数年。クリスマスに自作の革細工のきめ細かい模様のベルトの贈り物。「牧会の慣れを戒めよ」。結婚式を挙げた若いカップルからの立派なベルト。「くたびれと衰えの影は周囲には目立つ」。
- 5、エフェソ6:14では「神の武具を身に着けなさい。真理を帯として腰に締め、正義を胸当てとして着け・・・救いを兜とし・・・霊の剣、すなわち神の言葉を」。教会も一世紀を過ぎ、制度も確立してくると、一層の信徒への戒めが必要になったのであろう。が、軍隊用語を不用意に使うのはいただけない。その神経は軍隊の無自覚な肯定ではないか。「帯」は日常生活の「帯(ベルト)」であってよい。
- 6、安昌浩(アン・チャンホ、1878-1938)。朝鮮の独立運動家。最後の言葉。「私には、今死の恐怖はない。私の同胞が苦しんでいる。心が痛む。日本は戦争を、自分の力に余る戦争を始めたが、この戦争でかならず破れる。困難に耐えて下さい。日本の圧制がますます過酷になり、独立がいつ成就されるか分からないからといって気を落とすな、待ちつつ、望みを抱け」